

毛沢東伝の軌跡

——蕭三作の伝記にみる毛沢東のイメージ形成

丸 田 孝 志

はじめに	57
I 蕭三による毛沢東伝の概要	58
II 「救星」と「紅太陽」の登場 ——スターリン生誕慶祝から毛沢東崇拜へ	63
III 「毛沢東同志の初期革命活動」を巡る加筆修正	67
IV 『毛沢東同志的青少年時代』を巡る加筆修正	76
おわりに	85

はじめに

1930年代後半以降、毛沢東の中国共産党（以下、中共）内での権威の最終的確立に伴い、毛個人の伝記が次第に形成されていった。毛の伝記については、周一平『毛沢東生平研究史』（中共党史出版社、2006年）が、1937年（以下、西暦の19を省略）のE. スノーによる毛へのインタビュー記事を中国語に翻訳した『毛沢東自伝』（上海黎明書局出版社、1937年など。以下、『自伝』）から⁽¹⁾、20世紀末までの主に中国国内において中国語で刊行された毛の伝記の生成過程や特徴を長期的な視点でまとめている。同書は、毛の伝記が回想、宣伝の性格を持つものから出発し、次第に個人崇拜や政治のための道具と化し、文革終了後、学術研究として成熟していく過程を追っており、中国国内刊行の毛沢東伝の研究として最も網羅的なものである。ただし、同書も公式的な中共史の枠組みから完全に自由ではなく、伝記の成立や叙述の変化について然るべき検討が加えられていない場合がある。特に問題であるのは、国際共産主義運動における先行する経験としてのスターリン崇拜の影響について、全く言及していないことである。石川禎浩によれば、毛沢東思想はマルクス主義の中国化を唱えながらも、『全連邦共産党(ボ) 歴史小教程』(История ВКП (б). Краткий

курс, 1938. 以下、『連共党史』) が描く路線闘争史を基調とするスターリン主義の歴史観を範として成立しており、中共にとってソ連モデル以外に参照可能な枠組みはなかった⁽²⁾。そうであるならば、当然毛の伝記の形成に関しても、ソ連モデルやスターリン崇拜との関係が検討されるべきであろう。

中国人による最初の本格的な毛の伝記の作者となったのは、湖南省湘郷県出身の中共黨員で、東山小学、湖南第一師範学校において毛の同窓生であった蕭三(1896～1983)である。蕭三は38年から54年まで、79年から83年までの前後20年の長きにわたって毛の伝記の執筆・修正を行い続けた。また、彼自身が長期的にモスクワに滞在し、スターリン崇拜の現状を熟知していた事実は、上記の問題の考察にも手がかりを与えるであろう。小論では主に44年と49年に成立する代表的伝記二編を中心に、その加筆・修正・普及の過程から、毛の権威形成を巡る中共の戦略の特徴について検討したい。

I 蕭三による毛沢東伝の概要

1 毛沢東伝の形成

石川禎浩によれば、中共駐コミンテルン代表団は36年、モスクワにおいて、中共創立15周年記念行事の一環として、ロシア人ハマダン(Хамадан)の手になる中共最初の毛の伝記を刊行している。同年には高自立の作と推定される、より本格的な伝記「毛沢東伝略」(以下、高自立「伝略」)も執筆されたが、刊行されることはなかった⁽³⁾。スノーの著作 *Red Star Over China* (初版は、Victor Gollancz, 1937. 中国語版は『西行漫記』復社、1938年など。以下、スノー著)の刊行以降、モスクワにおいてようやく中国人による本格的な毛の伝記が蕭三によって発表される。蕭三は左翼作家連盟駐ソ連代表としてモスクワに滞在中、38年10月までにロシア語で毛の伝記を執筆・発表し、12月に『青年近衛軍』(*Молодая Гвардия*)に加筆修正して再発表した⁽⁴⁾。蕭三は39年3月にモスクワを離れ、5月には延安に帰任しているが、その後、40年にはモスクワで『不可征服的中国』(ソ連国立軍事出版社、*Китай непобедим*, Воениздат)に彼の手になる伝記「毛沢東」(*Мао Цзэдун*)が発表されている⁽⁵⁾。

蕭三による伝記「毛沢東」は、前段部分は少年時代から新民学会時代までの彼の回想で、後段部分は紅軍時代から日中戦争までを描いており、後の彼の手になる一連の伝記の基礎となっている。この伝記においては、既に明晰な頭脳、大衆を組織する力、英邁な指導、民情に通じ、民衆の学生となる態度、部下への思いやり、質素儉約、規律の遵守など、後の毛の伝記と物語の特徴をなす、毛の美德・魅力・能力の基本的内容が既に備わっている⁽⁶⁾。「毛沢東」は、39年10月の中共第六期六中全会における毛の報告「論新階段」から、

「共産党員は実事求是の模範でなければならず」、「毎日民衆の教師であり、しかしまた毎日民衆の学生である」⁽⁷⁾ という部分を引用して毛を讃えており、整風運動において共産党員を持つべき美徳として強調されるキーワード、「民衆の学生になる」が既に毛の重要な思想として提示されている。ただし、この時期、毛は中共内において理論的指導者としての地位を未だ確立しておらず、その権威は他の指導者を圧倒するまでには至っていなかった⁽⁸⁾。「論新階段」は「マルクス主義の中国化」という整風運動のもう一つの重要なキーワードも提示しているが、「毛沢東」は、モスクワでの発表という事情もあってか、慎重にこの語を避けている。また、高自立「伝略」が「革命の天才」、「偉大な軍事の天才」(67頁)などのような個人崇拜の賛辞を多く使用していたのに対して、「毛沢東」にはそのような表現はなく、同「伝略」が刊行されなかったことから考えても、この段階で毛への個人崇拜的表現を伝記に盛り込むことの合意はできていなかったとみられる。これに関して特徴的であるのは、「毛沢東」には紅軍時代の叙述において、毛と行動をともにする指導者として、朱徳が一貫して登場しており、毛の権威形成の初期段階において朱徳の存在が欠かせなかったという点である(なお、後述のように、蕭三による後の伝記は、刊行されたものが紅軍時代を対象としていないため、朱徳も登場しない)。蕭三が同時に朱徳の伝記を執筆していたことも、このような事情を物語っていよう。

蕭三は延安帰着後の39年5月に毛に面会して聞き取りを行い、41年12月14日『解放日報』に新民学会の発起とフランス留学運動についての短いエピソードを述べた「毛沢東同志の少年時代」を発表した。紙面においてこれは「我所知道的毛沢東同志の少年時代」の二つの節であると解説されている。執筆中の伝記の一部を新聞・雑誌に連載するという後の蕭三の執筆スタイルに鑑みれば、この時点で彼は「我所知道的毛沢東同志の少年時代」という題目で毛の伝記を準備していたと考えられる。

周一平は、蕭三による伝記執筆や毛の宣伝は、中共中央による毛の宣伝工作に歩調を合わせたもので、中央指導者の支援と督促の下、進められたとするが⁽⁹⁾、管見の限りの先行研究では、この時点までの彼の伝記執筆の過程に、中共指導者の直接の指示や中共の組織的関与があったことは明示されていない。王政明『蕭三伝』には、蕭三の「毛沢東伝」に目を通して任弼時が、38年10月に蕭の求めに応じて、毛と朱徳のソビエト革命期から日中戦争勃発までの情報を提供したのみが記されている⁽¹⁰⁾。また、39年5月の毛との面談では、蕭三が自作の伝記を加筆修正したいと協力を要請したのに対し、毛は「何も無い時に「昔のことを思い返す」のも面白いことだ。私は政治的にあなたを助けることができる。しかし、あなたは歴史の事実について、研究、調査することでようやくものが書ける」、「歴史の事実を一編の小説にし、一人の人物を導線とすることは面白い。しかし、ス

ノーに四晩付き合ってから、私はもう自分のことは語りたいとは思わなくなった」と述べ⁽¹¹⁾、やや消極的に伝記執筆に反対しない意向を表明し、1週間後に聞き取りに応じている⁽¹²⁾。この場合でも、伝記の執筆は蕭三個人の提案として描かれている。

上述のように毛の伝記の作成は、すでに建党15周年を機に中共駐コミンテルン代表団の関与の下で開始されており、中共の最高指導者の伝記が一党員の意志のみで、国内外で随意に発表されるということは考えられない。スノー著の中国語版刊行に際して、情勢の変化などのため中共関係者とスノー自身による一部の削除・修正が行われていることから推察されるように⁽¹³⁾、伝記執筆の契機は、コミンテルンおよび中共が、これとは異なる独自の權威を主張する根拠となる伝記を必要としたためと考えられる。また38年は、前年の王明の延安への帰任、任弼時のモスクワ到着とコミンテルン中国支部代表着任の時期に重なっており、同年9月に王稼祥がコミンテルンの指示を延安に伝達して、中共の統一指導の問題に関するコミンテルンの最終的意思が示されたことから、これを機に中共側が毛の経歴・人物などの情報をコミンテルンに提供するため、伝記を整えようとしたという事情も考えられる。

蕭三が王明の「お気に入り」ではなく、任弼時の指示によって帰国できたという指摘⁽¹⁴⁾からは、伝記の作成の背景に延安の中共中央と王明の対立があったとの推測も可能であるが、石川によれば王明は34年頃から国際共産主義運動の舞台において、一貫して毛を中国革命の指導者として積極的に広報していた経緯があり⁽¹⁵⁾、36年には中共駐コミンテルン代表団主催の事業として毛の伝記が刊行されたことからわかるように、毛と王明の関係がこの時点で完全に対立的であったとは考えにくい。むしろ、先行研究が蕭三による伝記執筆の契機の問題に全く触れないことは、王明自身がこの過程に関与した可能性すら推測させる。統一戦線の方針を巡る毛と王明の対立が鮮明になった後も、延安の『中国青年』第2巻第9期（1940年）に掲載された毛の物語の特集記事「記毛沢東」の冒頭には、王明自らが青年に対して毛の精神に学べと提唱した講演「学習毛沢東」が掲げられており、王が引き続き毛の權威形成に協力している状況が確認できる。

2 「偉大的五十年」執筆から『毛沢東同志の青少年時代』の刊行まで

43年、当時、毛沢東、劉少奇とともに中央書記処を構成していた任弼時が蕭三に対して、毛の50歳の慶祝として伝記の執筆を指示した。蕭三は、中共中央宣伝部部長胡喬木の支援の下、関係者を訪問し、資料を収集して、12月末には『毛沢東伝』を完成したが、毛が生誕慶祝を謝絶したことから、生誕の「記念に関する文章」は発表されなかったという⁽¹⁶⁾。その後、44年7月1日と2日の『解放日報』に「毛沢東同志の初期革命活動—偉大的五十

年」的一章（初稿）」（以下、「初期革命活動」）が掲載された。「初期革命活動」は、20年夏に毛がマルクス主義者となったエピソード、23年までの新民学会の活動、労働者との触れ合い、中共第一回全国代表大会（以下、一全大会）への参加、湖南省における労働運動の指導などについて描いている。この伝記は、整風運動の観点を反映して、マルクス・レーニン・スターリンと対置する形で、マルクス主義の中国での実践者としての毛の事績を、「毛沢東主義」の語を使用しながら讀えるものである。また、蕭三の回想というこれまでのスタイルを改め、「毛」、「毛沢東」といった呼称も「毛沢東同志」、「沢東同志」と改められて、中共の立場から書かれた正規の伝記の形式が整えられた。もちろんこれは、任弼時の指示による生誕50周年記念の伝記の編集という要請に基づいた体裁であろう。45年1月には、これを転載したと思われる同名の単行本が華北新華書店から刊行された。46年7月1日、蕭三は『晋察冀日報』に国民革命期の毛の活動を描いた「毛沢東同志在大革命時代—「偉大的五十年」的一章（初稿）」を、同月、同区の『北方文化』第2巻第3期に「毛沢東同志略伝」を發表した。

この頃、蕭三は「中央のある指導者」の委託を受けて、『毛沢東伝』の執筆と民謡集『中国出了個毛沢東』の編集を主要な任務とするようになり、47年から48年まで多くの関係者を訪ね、大量の資料を集めたとされる⁽¹⁷⁾。その一方で彼は、46年から晋察冀辺区の『時代青年』に「毛沢東同志的兒童時代」の連載を開始し、冀晋文聯の『新群衆』第3巻1期（発刊年不明）に「他是怎樣刻苦自學的」を掲載した後、47年から「毛沢東同志的青年時代」の連載を開始している。伝記の範囲は、毛の生い立ちから新民学会によるフランス留学運動までを対象としている。これら46年以降刊行された伝記では、毛個人の物語に時代背景の叙述を大量に加え、中国近現代史の読物としても読める内容となっており、同時に毛の理論的著作を随所に紹介する形で基礎的な理論学習の教材としても成立している。47年には各地で『毛沢東同志的兒童時代』、『毛沢東同志的青年時代』の単行本や、「毛沢東同志略伝」、「毛沢東同志的兒童時代」、「毛沢東同志的青年時代」、「初期革命活動」を1冊にまとめた『毛沢東同志、兒童時代、青年時代与初期革命活動』が刊行されるようになったという⁽¹⁸⁾。48年、西柏坡に到着した毛の同意を得て、まず『毛沢東同志的青少年時代和初期革命活動』が刊行されることとなった⁽¹⁹⁾。同年、蕭三は『中国出了個毛沢東』を完成させている⁽²⁰⁾。

49年3月、改めて多くの修正を行った『毛沢東同志的青少年時代』（北京人民出版社）が刊行された。この際、後述する問題のため、「初期革命活動」部分は採録されなかった。同書は8月には新華書店より全国規模で刊行された（以下、『青少年時代』）⁽²¹⁾。

3 中華人民共和国成立以降の毛沢東伝

建国後も蕭三は毛の伝記の更新を続け、51年には「初期革命活動」の修正原稿（以下、「初期革命活動修正稿」）を『中国青年』に連載している。これらは執筆中の『毛沢東同志的初期革命活動』の2つの章とされている。この他、彼は52年冬に長沙、韶山、湘郷を訪れて現地の古老や毛の旧友と面談するなどして、54年には『毛沢東同志的青少年時代和初期革命活動』（中国青年出版社）を発表したが、「事情により広く刊行されることはなかった」⁽²²⁾。

以後、蕭三による伝記の執筆は長く中断されるが、一方で53年から『中国青年』に「毛沢東同志的初期革命活動」を連載していた湖南省委宣伝部長李銳が57年に『毛沢東同志的初期革命活動』（中国青年出版社）を刊行している。題目と対象時期は蕭三の一連の著作に重なり、この頃から伝記執筆の任務が現地で原史料を収集できる李銳に委ねられるようになったものと考えられる。59年の李銳の失脚後は、58年から62年にかけて湖南第一師範時代の毛の同級生で中国民主同盟湖南省主任委員の周世釗が各種雑誌・新聞に毛の物語を発表するようになり、文化大革命（以下、文革）収束後の77年には『毛主席青年時期的幾個故事』（中国少年儿童出版社）を刊行した。一方、文革中に失脚していた蕭三は79年には伝記の加筆修正を再開し、「毛沢東同志在五卅時期」（『青年運動回憶録』第2集、中国青年出版社）の発表後、翌年、李銳著と同じく1920年代前半の労働運動の指導までを対象とする『毛沢東同志的青少年時代和初期革命活動』（中国青年出版社、以下、80年版伝記）を、83年には児童向けの『毛沢東青少年時期的故事』（遼寧人民出版社）を刊行している。また、この間、関連する回想を『人民日報』などに発表している。

蕭三はこれらの著作の他、47年末には七全大会までを対象とする毛の伝記9編を初稿として完成させていたという⁽²³⁾。これらはモスクワでの伝記執筆に端を発し、生誕50年記念の伝記編纂事業「偉大的五十年」として構想された内容を含み、その後完成したものと考えられるが、結局全て刊行されなかったようである。また、「初期革命活動修正稿」の冒頭では、同伝記が「人民革命戦争」（戦後内戦）までを叙述することが予告されており（『中国青年』第56期、1951年、33頁）、少なくとも51年の段階では、共和国成立に至るまでの毛の伝記の執筆が蕭三の任務とされていたようである。未公開の原稿は、彼のもとに返却されなかった「団結的大会、勝利的大会」を除いて、「全てを中央機関に渡して、党史編纂者の参考に供する予定であ」った⁽²⁴⁾。

II 「救星」と「紅太陽」の登場

——スターリン生誕慶祝から毛沢東崇拝へ——

毛の伝記の登場と毛への個人崇拝の形式は、国際共産主義運動におけるスターリン崇拝の形式を継承していた。毛を讃える「太陽」、「救星」という語は、改造民謡「東方紅」などに織り込まれ、中共自身も「救星」を民間信仰における「救いの神」として、毛や中共への支持を示す民衆の言葉として使用してきたが、これらの語は30年代後半、大粛清を経た後のソ連において、スターリンを讃える語（спаситель：救世主、солнце：太陽）として使用されていたものであった。モスクワでの粛清裁判においては、被告、控訴人、弁護人の全てが「スターリンこそが人民の救世主であり「世界の希望」であることを証明しなければならなかった」⁽²⁵⁾ という。カザフスタン、ベラルーシ、タジキスタンの詩人・歌手らは、スターリンを太陽にたとえて讃える詩歌を詠んでいた⁽²⁶⁾。

このようなスターリン崇拝の定型句は、39年12月のスターリン生誕60周年に際して中共関係者にも使用されており、延安での慶祝大会において毛は「スターリン同志は全ての被圧迫者の救星である」⁽²⁷⁾ と発言している。スターリン生誕記念日前日の39年12月20日の『プラウダ』は紙面5頁を割いてスターリンの略伝を掲載したが（*ПРАВДА*, 20. Декабрь. 1939）、延安でも『解放』第39期（1939年）のスターリン生誕記念特集や『新華日報』（1939年12月20、23日）に呉玉章「斯大林伝」が掲載された。同伝は、スターリンを「全世界人類大災難の救星」、「マルクス、エンゲルス、レーニンと共に人類史上最も偉大な四人の人物」と讃え、「彼はレーニンがマルクス主義を発展させたように、レーニン主義を発展させた」などと指摘して、スターリンを国際共産主義運動の正当な後継者として位置付けている。このような評価は、既に29年のスターリン生誕50周年の慶祝に際しての『プラウダ』の賛辞、「マルクスとレーニンの事業の忠実な継承者」などでも確認できるが（*ПРАВДА*, 21. Декабрь. 1929）、上述の『解放』第39期に転載された『プラウダ』の社説“Могучее идейное философское оружие большевизма”（布爾什維克主義之有力的思想武器）においては、『連共党史』とスターリン「レーニン主義の問題」という理論的著作に基づいて、スターリンの地位が確認されている（*ПРАВДА*, 9. Сентябрь. 1939）。新聞雑誌の記念特集では、ソ連紙のスターリン生誕慶祝の紙面と同様に、比較的広いスペースを割いてスターリンの肖像が掲げられた。上述の『プラウダ』掲載のスターリンの略伝（Institut Marksa-Engel'sa-Lenina, Иосиф Виссарионович Сталин: краткая биография）は、40年には延安の解放社（聯共（布）中央附設馬恩列学院編『約西夫・維薩摩力昂諾維奇・斯大林（伝略）』）と重慶の讀書出版社（蘇聯馬恩列学院編（鳴世訳）『斯大林伝』）からそれぞれ中国語版が出版された。

蕭三も「祝斯大林六旬大寿」と題する詩において、「全世界プロレタリアートの導師、領袖」、「あなたは太陽のようだ。あなたの光は五大州と五大洋を照らしている」とスターリンを讃えている（『中国青年』第2巻第3期、1940年）。なお彼は、39年のロシア革命記念日に「インターナショナル」中国語版歌詞を改訳し、その歌詞を同じく『中国青年』第2巻第3期に発表した。その際、旧訳の「従来没有什麼救世主：もとより救世主など存在しない」（原歌詞：Il n'est pas de sauveurs suprêmes,：至高の救世主は存在しない）を「従来没有什麼救星」に改めており⁽²⁸⁾、指導者崇拜に関わる訳語が、スターリン崇拜の中共への移植を機に厳密に統制されていることがわかる。インターナショナル原歌詞では「太陽」も歌い込まれているが（Le soleil brillera toujours!：太陽はいつまでも輝くであろう!）、瞿秋白訳の「一輪紅日照遍五大洲!：一輪の赤い太陽が五大州を照らすであろう!」を蕭三は「鮮紅的太陽照遍全球!：鮮やかな赤い太陽が全地球を照らすであろう!」と改めている（彼自身の旧訳は不明⁽²⁹⁾）。「赤い太陽」という中国語版独自の訳は、スターリン崇拜の定型句とつながって「東方紅」、「紅太陽」という毛の個人崇拜のシンボルへと転化していくことになる。

中共の毛沢東崇拜は、このような「太陽」、「救星」などの表現による指導者礼賛、生誕の慶祝と伝記の編纂というスターリン崇拜の一連の形式を参照しながら、準備が進められていく。高自立「略伝」が既に毛を「マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン学説理論の実際の執行者」(67頁)と讃えていたことからわかるように、このような準備は、毛の権力掌握に伴い早くから開始されていたと考えられる。37年に発表された「矛盾論」において毛は「陳独秀主義」、「ブハーリン主義」、「李立三主義」、トロツキズムを批判する中で、「中国共産党における自らの地位を、ソ連共産党におけるスターリンの地位に等置し」ており⁽³⁰⁾、38年末、モスクワの任弼時から『連共党史』の出版の情報がもたらされると、毛はこれを取り寄せて翻訳させ、全党に学習を提唱した⁽³¹⁾。党史を個人化し、スターリンを正統な革命の後継者として英雄化し、党史を善玉と悪玉、敵・友の対抗構造として描く『連共党史』は⁽³²⁾、高華によれば、毛が党内闘争を展開するための「有用な経験と策略を大量に提供し」、「毛が中共のイデオロギーの解釈権を奪取するための弾薬を運んだ」⁽³³⁾。このような『連共党史』の構造は、延安整風運動の総仕上げとして、党の歴史を総括する45年の「關於若干歴史問題的決議」に引き継がれることになることになる⁽³⁴⁾。

路線闘争総括の準備が進められる一方で、スターリン崇拜の盛り上がりを経て、これに倣う毛の表象のシンボル化が進行していく。上述のように40年、『中国青年』に紅軍指導者4人による毛についての回想が掲載され、43年には毛の50歳慶祝のための伝記編纂が計画された。40年に成立する沢東青年学校の名称も、都市、学校、工場などに理論家・指導

者の名を冠するソ連の手法に倣ったものであることは言うまでもない。一方で「東方紅」にみられるように、大衆の語りに託しながら、毛沢東崇拜の定型句が浸透していく。毛の代表的な物語として内戦期に普及する作品の一つ、王若望「一張名片」では「ある人は毛沢東同志を、地球を温め照らす太陽にたとえる」（『戦友報』1944年7月1日）、「冬の暖かい太陽にたとえる」（『東北日報』1945年11月10日）などと叙述されたが、これらはいずれも、スターリン崇拜の比喩に一致する表現である。

戦後内戦期にかけて、「太陽」、「救星」という語を用いた毛沢東礼賛の改造民謡が各地に成立していった。蕭三による収集作業を元に刊行された歌謡集、中国民間文芸研究会編『中国出了個毛沢東』（人民文学出版社、1951年）に収められた毛を讃える全国各地の歌謡51（漢族18/少数民族33）篇の内、歌詞に「太陽」を含むものは22（7/15）篇、「救星」を含むものは6（4/2）篇であり（この内、両者を含むもの3（2/1）篇）、スターリン崇拜の定型句を利用した改造民謡が全国に拡大していることがわかる。蕭三が編集の過程で定型句を用いる改造にどの程度参与したかは不明であるが、各地の少数民族が詩歌を通じて指導者を崇拜し、諸民族の団結を強調するソ連の形式は、中華人民共和国にも継承されたのである。

ただし、中共自身の語りとしては、毛に対する「太陽」、「救星」の比喩は慎重に行われた。「初期革命活動」では毛に直接太陽の比喩を用いず、中国に到達したマルクス主義を曙光にたとえ、毛によって「それが掌握、発揮された後」、「一輪の紅日が高く天空に懸るように、中国の大地は光明の世界と化した」と叙述していた。毛沢東思想を中共の指導思想として党章に明記した中共中央七全大会における劉少奇報告は、中共が「すでに全国人民によって彼らの唯一の救星として認められている」⁽³⁵⁾ とのみ指摘しており、公式の文書では毛個人と「救星」は民衆の言葉としても結びつけられていなかった。

46年の蕭三「毛沢東同志略伝」は「初期革命活動」と同様、毛の革命活動を整風運動の文脈でマルクス・レーニン主義の中国化の実践として描くもので、歴任した役職やその著作を列挙して革命への貢献を讃える形式はレーニン・スターリンの伝記に一致している。同略伝冒頭ではスターリン崇拜の形式を踏襲して、「深淵な思想家、傑出した理論家、博識な学者、偉大な人道主義者、卓越した人民政治家、軍事家、戦略家、中国共産党の創設者であり建設者、党中央委員会主席、中国人民の偉大な導師であり領袖、毛沢東同志」と各種の賛辞が羅列された⁽³⁶⁾。また、民衆が毛を「毛聖人」、「救星」、「福星」と称していると指摘した上で、毛は「中国有史以来初めての正しく人民を救う、人民のために福をもたらす聖人である」と強調している。「救星」は「聖人」、「福星」と並置されて民衆の語りに託されることで、伝統文化の脈絡に位置付けられ、蕭三はこの中から「聖人」をとって、中

華の統治者としての毛の権威を確認している。

46年初稿の「毛沢東同志的兒童時代」では「この部屋で毛沢東同志が——今日の中国人民の英邁、偉大な領袖、導師、我々の毛主席が誕生したのである」⁽³⁷⁾と叙述していたが、49年の『青少年時代』においては、「今日の中国人民の英邁、偉大な領袖、導師、救星、我々の毛主席」(3頁)と「救星」が加筆され、ようやく「救星」の語が、民衆の語りによってではなく、筆者の言として使用されることとなった。後述のように蕭三は『時代青年』での連載に際して、儒教的価値を示す表現を伝記に盛り込むことがあったが、「毛沢東同志略伝」が採用した「聖人」という語は初稿から採用されなかった。

人民共和国建国後、中共系の新聞雑誌は49年12月のスターリン生誕70周年に際しても、39年と同様の定型句を使用したスターリン崇拜の演説、詩、伝記などを掲載し、蕭三も10年前の詩を改編して、同じ字句でスターリンを太陽に喩えて讃えている。ただし今回は詩の中に「我々中国の毛主席は あなたのよい学生であり」「我々は叫ぶ：万歳スターリン！ 我々は叫ぶ：万歳毛沢東！」などと、スターリンの権威の下に毛を讃える言葉が埋め込まれた(『中蘇文化』第1巻第2期、1949年)。10年の歳月を経て、毛がコミンテルンの権威の下、中共の絶対的指導者としての地位を確立したことが象徴的に示されたといえる。

ソ連においてもレーニンを讃える詩にスターリンを登場させることがあり、スターリンもまた自らをレーニンの学生と位置づけ続けていた⁽³⁸⁾。毛沢東思想の精神を示す「民衆の学生となる」という語も、本来はこのような革命の指導者の学生たるべき共産党員の姿勢を、その革命が奉仕すべき民衆に学ぶという構造に転換したものであった。スターリンがレーニンの学生としての立場から、スターリン主義という用語を使用しなかったように、毛もマルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの学生と位置づけられ、毛沢東主義という用語も最終的には毛自身の判断によって採用されなかった⁽³⁹⁾。43年に50歳の生誕慶祝を辞退した毛は、それ以前の同年元宵節に26人の棗園村の老人を祝寿の宴に招待しており、その後、旧暦の日付で51歳になる45年1月2日(甲申年11月19日)に改めて生誕慶祝を行いたいという同志らの提案に対しては、44年12月に炊夫、馬夫から主席、総司令までの楊家嶺の50歳以上の同志の集団祝寿を実施し、自身は欠席したという⁽⁴⁰⁾。その行動は、当然「民衆の学生となり」、「人民に奉仕する」毛の権威を高める役割を担うものであった⁽⁴¹⁾。

なお、上述の『青少年時代』の文章は、80年版伝記で「今日の中国人民の偉大な領袖、導師、我々の毛主席」と訂正され、「英邁」、「救星」の語が除かれた。「救星」の語を削除した際、蕭三の脳裏には自らが訳した「從來沒有什麼救世主(救星)」というインターナショナルの歌詞が去来したかもしれない。

以下、蕭三による一連の伝記の変遷について、特に「初期革命活動」と『青少年時代』を中心に、適宜「毛沢東」、スノー著⁽⁴²⁾などとも比較しながら、その特徴と再三にわたる加筆修正の意図や問題を、スターリン崇拜との関連も意識しながら論じていく。

Ⅲ 「毛沢東同志的初期革命活動」を巡る加筆修正

1 湖南での政治運動の叙述

「毛沢東」における少年時代のエピソードは、蕭三自身の回想として描かれているが、スノー著と内容が同じか重なり合うものが多い。新民学会時代の政治運動について、スノー著では運動を弾圧する省権力に抗議して、省議会を襲撃した事件、10月革命慶祝のデモ隊を組織して、警官隊と衝突した事件が記載されている（105～106頁）。これらのエピソードは『自伝』にはなく、スノー著において加筆されたものである。

「毛沢東」は、新民会の活動と10月革命のデモについて叙述しているが、省議会襲撃には言及せず、張敬暎罷免のため北京政府への請願を行ったことに言及している。また、労働運動を巡る湖南省長趙恒惕との交渉についても述べられている。スノー著のエピソードは、「軍閥」政権下での議会政治の虚偽性や、憲法に基づく民衆の要求が権力によって踏みにじられたことを語るもので、毛が民衆を組織した運動の重要性を認識するきっかけとなり、その直後にマルクス主義に関する著作を読んでマルクス主義の信念を確立する叙述が続いていることから、毛とマルクス主義をつなぐ重要な伏線となっている。これに対し「毛沢東」の叙述は、社会運動、階級闘争について描きつつ、権力者に対する毛の交渉力も評価する内容になっている。

このような叙述の差異は、モスクワでの刊行という事情により、「毛沢東」においてはロシア革命が毛をマルクス主義へと導く唯一の契機として描かれていることも関係していると思われるが、国共合作が比較的堅調な時期において、合法闘争を堅持し、交渉を通じて問題を解決する毛の姿勢を通じて、中共の統一戦線堅持の姿勢を強調する意図によるとも考えられる。「毛沢東」とほぼ同じ頃に記述された謝覺哉の回想「幾点断片」（『中国青年』第2巻第9期、1940年）でも、趙恒惕との交渉の場が重要なエピソードとして描かれ、毛が運動の暴走を抑止したことを評価する趙の言が引かれており、当時を知る者には、交渉力に長けた労働運動の指導者という毛の姿が、より実像に近いものであったのかもしれない。

一方、「初期革命活動」では、スノー著に描かれた省議会襲撃、デモ隊の警官隊との衝突、および趙恒惕との交渉について語られている。このエピソードに続く、「民衆の行動か

ら得られる民衆の力があってこそ、大きな改革を実現する保証を得られる——沢東同志はこの真理を見出し、信じたのである」という一文も、スノー著の叙述をほぼそのまま引き写したものである。つまり、より穏健なイメージの「毛沢東」の叙述よりもスノー著の叙述に従う形で、革命家毛沢東の原点が示されている。ただしスノー著では、湖南省憲法が人民に集会、組織、言論の権利を保障していると主張するデモ隊に対し、警察は「憲法について教えられるためにそこに来たのではなくて、総督趙恒惕の命令を実行するために来ているのだ」（106頁）と答えたことを受けて、上述の文章が続くのに対して、「初期革命活動」はこの部分を掲載していない。省憲法に保障された権利の実現という立憲主義的な課題は、中国におけるマルクス主義の実践者、中共の指導者の伝記において、もとより強調されるべきものではなかったかもしれない。

建国後の「初期革命活動修正稿」では、省憲法が人民に許す集会、組織、言論、出版などの自由をデモ隊が要求したことを加筆し、この叙述は80年版伝記にも引き継がれた。この他、「初期革命活動」が趙恒惕との交渉において毛が「省憲法などを利用し」と述べているのに対し、「初期革命活動修正稿」では「省憲法に規定された条文を上げて、「人民には……自由……があり、理由なく逮捕されない(中略)」などと、面と向かって趙恒惕に質した」（『中国青年』第64期、1951年、32頁）と、憲法の価値そのものを重視する修正が行われている。内戦期の憲政を巡る国民党との闘争を得て全国政権を成立させた中共が、建国後も憲政を通じた権力の正当性構築を一定程度意識せざるを得なかった状況が反映されていると考えられる⁽⁴³⁾。ただし、毛らが湖南省独立、省自治の実行を主張する宣言を発表したとする記述が、「初期革命活動修正稿」では削除されている。中共政権が地方に割拠する革命権力から全国政権へ転換したことにより、中共の指導者が推進した湖南自治運動も歴史叙述から抹消されるべきものとなった。

80年版伝記においては、趙恒惕との交渉に先立つ政務庁長との交渉においても、毛は「手に省憲法を持ち、その条文に基づいて意見を述べた」（120頁）と叙述され、省憲法の条文に依拠した趙恒惕との交渉の叙述もより具体的となった。李銳著の57年の伝記にも二つの交渉で省憲法に基づき議論する毛の姿が描かれているが（200頁、234～235頁）、これら憲法・憲政に関わる表現が復活するには20年以上の時間がかかった。

2 マルクス主義者への転換の叙述

毛のマルクス主義者への転換の叙述に関して、「毛沢東」では、北京大学図書館で無政府主義を論じるパンフレットをいくつか読んだこと、十月革命の勃発によって、毛は「義とみれば後には引かず」マルクス主義が示す道を進むことになったと指摘している。続けて、

最初に読んだマルクス主義の著作は『共産党宣言』であったと指摘する。スノー著では十月革命に触れながらも、二度目の北京訪問の際に読んだ『共産党宣言』、カウツキーの『階級闘争』、カーカップの『社会主義史』の3冊の本によって、マルクス主義の信念を植え付けられたことを述べ、毛の主体的な読書を強調した叙述がなされている(106頁)。これに対して「初期革命活動」では、20年に『共産党宣言』、『階級闘争』、『社会主義史』を読んで、マルクス主義を信奉するようになり、以後動揺することなくマルクス主義の大道を歩んだと、著者名抜きでこれらの著作が叙述されている。

しかし、このエピソードは、先行研究においても毛がこれらの著作の「忠実な読者であれば、共産主義の道を選ばなかったであろう」と指摘されるように⁽⁴⁴⁾、ソビエト式の社会主義を目指す中共にとっては、本来組織原則に関わる重大な問題を孕んでいる。ドイツ社会民主党の「エルフルト綱領」の解説の一章である『階級闘争』は議会を通じた合法闘争に重点を置き、カウツキーはソビエト式の社会主義を批判してレーニンと対立している。『社会主義史』はアナキズムも含む社会主義思想のさまざまな潮流を幅広く紹介し、フェビアン派の立場から唯物史観や余剰価値説、暴力革命を否定的に扱ったものである。また先行研究においては、20年夏の段階で毛はアナキズムに共鳴していることが指摘されており、マルクス主義者への転換は、20年夏というスノー著の叙述よりも若干遅いことが明らかになっている⁽⁴⁵⁾。この他、3冊の訳書の出版時期を巡る問題も含め、このエピソードには疑義が呈されてきた。

モスクワにおいてロシア語で書かれた「毛沢東」ではさすがに、このエピソードは採用されていない。蕭三の手によるとみられるロシア語による『自伝』の抄訳(ロシア国立社会政治史文書館蔵)では、当該部分において『共産党宣言』のみが取り上げられ、他の2冊は削除されている⁽⁴⁶⁾。しかし、周一平の指摘するように、国内においては、国民党などによる毛への誹謗中傷に対して、彼の社会主義思想に対する素養を示す論拠として、このエピソードの価値が認められたということなのかもしれない⁽⁴⁷⁾。いずれにしても、『自伝』やスノー著によって世に広まったこの叙述は、一応毛自身が語った、毛とマルクス主義をつなぐ核心的なエピソードとして流布しており、中共機関紙の『解放日報』においてこの叙述が採用されたことは、中共自身がこれを権威付けしたことに等しい。国際共産主義運動に通じ、モスクワにおいて大粛清を経験した蕭三が、この問題に全く無意識であったとは考えられないが、この叙述は蕭三や中共関係者には深刻に受け止められなかったようである。46年5月、『北方文化』に「初期革命活動」の内容の一部についての訂正の声明を発表した際にも、蕭三はこのエピソードを訂正することはなく、7月に発表された「毛沢東同志略伝」においても同様の叙述が繰り返されていた。

竹内実や王興國が指摘しているように、毛は日中戦争期にこれら3冊の本について改めて言及している⁽⁴⁸⁾。この毛の発言に従えば、毛自身がこの問題を深刻に受け止めず、エピソードどおりある種の自負を持ってこの3冊について記憶していた可能性が高い。41年9月、毛は婦女生活調査団に対する調査研究に関する講話の中で、「私は1920年に初めてカウツキー著の『階級闘争』、陳望道訳の『共産党宣言』、イギリス人の書いた『社会主義史』を読んで、人類には有史以来、階級闘争があり、階級闘争が社会発展の原動力であることを知り、初歩的に問題を認識する方法論を得られたことを覚えている」と語っている⁽⁴⁹⁾。この文脈から見れば、これらの本は社会主義に関する一般的な知識、理論を学ぶ上で、毛にとって特に重要であったということになる。

これらの著作は、毛とともにボルシェビズムの道を歩んだ蕭三にとっても、重要な意味をもった可能性がある。李銳によれば、20年5月以後、北京・上海などに成立した「マルクス主義研究会」の会員は、当時「系統的に翻訳されるようになった」マルクス主義に関する文献の中で、『共産党宣言』、『空想から科学へ』の他、『新青年』叢書の『階級闘争』、『社会主義史』を必読書としていたという⁽⁵⁰⁾。「マルクス主義研究会」は社会主義研究社の誤伝で、実態としては『新青年』発行元の新青年社を指すものとみられるが⁽⁵¹⁾、『階級闘争』、『社会主義史』の2冊は、社会主義文献を紹介した当時の多くの書目リストに紹介されており⁽⁵²⁾、アナキストらも含む各地の共産党組織の知識人ら⁽⁵³⁾によって熱心に検討された書物であると考えられる。周世釗によれば、毛らが経営した文化書社において、『社会主義史』は最もよく売れた本の一つであった⁽⁵⁴⁾。このような状況を見るならば、蕭三にとって、中国の変革を志す当時の青年知識人の選択は、マルクス・レーニン主義の「必然性」や「真理」に導かれて、コミンテルン・ソ連の指導や組織原則を受け入れたものというよりも、ボルシェビズムを含む社会主義思想を広範に学ぶ条件が整った段階において、様々な社会改造の理念と理論を主体的に学び、結論を導いた経験として記憶されるべきものであったのではないだろうか。毛は上の発言に続けて、以下のように述べている。

しかし、これらの本の中には中国の湖南も湖北もないし、中国の蒋介石も陳独秀もいなかった。私はただ4つの文字、「階級闘争」のみをとって、真面目に実際の階級闘争の研究を始めたのだ⁽⁵⁵⁾。

よく言えば批判的にこれらの著作を読んだ毛の関心は、あくまで中国の現実であり、当時の経験を共有する蕭三自身にとっても、中国革命の偉大な指導者は、このような試行錯誤の中から立ち上がった、というべきものであったのではないだろうか。

その後、「初期革命活動」を転載した各地の毛の伝記においてもこの3冊の本に関する記述は放置された⁽⁵⁶⁾。一方、『時代青年』の連載では「何冊かの無政府主義を宣伝するパンフレットを読んで、短い時間「影響を受けたが、すぐに科学的共産主義に取ってかわられた」（第4巻第2期、1947年、15頁）と、「毛沢東」に近い表現で描かれ、3冊の本には触れていない。そして、49年刊行の『青少年時代』で旧稿を大幅に修正した際に、「初期革命活動」部分を採録しなかったことで、スノー著初出の3冊の本についての叙述は一旦消失し、毛と社会主義に関する文献との出会いについては、スノー著にも記載のある、辛亥革命期に新聞やパンフレットで社会主義の紹介文を読み、賛同したというエピソードのみが残されることとなった。『時代青年』においては、このエピソードをもって「これが後に彼が科学的社会主義マルクス主義を自ら研究し信奉することに、影響がなかったとはいえない。またその根源であるといえなくもない」（第3巻第4期、1947年、8頁）としていたが、『青少年時代』ではこの文言は削除されている（94～95頁）⁽⁵⁷⁾。毛のマルクス主義者として成長は、あくまで実践によって示されることとなった。

建国後の「初期革命活動修正稿」では、「1920年夏、沢東同志は理論上のみならず、ある程度の行動においても、既に揺るぎないマルクス主義になっていた」という一文を削除しているが、3冊の本のエピソードはそのまま掲載している（『中国青年』第56期、1951年、33頁）。このエピソードは80年版伝記にも採用されており、同書では『共産党宣言』のみ著者名が記載され、他の2冊については「当時外国語から中国語に翻訳された」との説明を付して、やはり著者名なしで紹介されている（86頁）。

米中国交正常化が実現した79年、中国においてスノー著の訳書が解禁され、カウツキー、カーカップの名も再び読者の目に触れることとなった⁽⁵⁸⁾。後述のように、この頃から毛の伝記など中共史に関わる政治的なタブーは大きく後退しており、83年の児童向け伝記『毛沢東青少年時期的故事』においては、『共産党宣言』によって毛がマルクス主義に対する信念を確立したことを強調しながらも、スノー著の毛の口述をほぼそのまま引用して、同じくその信念を確立した本として、『階級闘争』、『社会主義史』が著者名を付して記載されるようになったのである（78～79頁）⁽⁵⁹⁾。

3 第一回全国代表大会を巡る問題

46年5月、蕭三は「初期革命活動」の内容の一部に誤りがあったとして、『北方文化』誌上に訂正の声明を出している⁽⁶⁰⁾。誤りの一つとされたのは、中共一全大会の叙述において、後の対日協力者、トロツキスト、中共の立場から見た「反革命分子」の名前がそのまま記載されていたことである。「初期革命活動」の叙述では大会参加者12人について、烈士を

含む黨員には同志の呼称を付し(毛沢東、何叔衡、董必武、陳潭秋、王寒焮)、離党者は名前のみで表記し(李達、李漢俊、包惠僧、俞秀松、張国燾、周仏海、陳公博)、この内、革命の裏切り者とみなされる張国燾、周仏海、陳公博らの名前の後に「(!)」を付している。スノー著において毛は張国燾、周仏海、陳公博らの大会参加について証言していたが(『自伝』では参加者は記載されていない)、彼らの参加の事実は、その後の情勢の変化によって、伝記叙述上の問題を引き起こすことになった⁽⁶¹⁾。

まず、蕭三が「初期革命活動」において敢えてこれら後の「反革命分子」の参加の事実を挿入したのは、単にこれが人の気を引くエピソードであったためでも、彼の政治感覚の欠如のためでもなく、むしろ当時の中共の政治的な要請によるものであると考えられる。この時期延安においては、毛の権威を最終的に確立する整風運動に付随して、激しいスパイ摘発の政治運動(抢救運動)が展開されており、毛の偉大さを学ぶ黨員は、同時に中共がその誕生の時から、様々な敵や「錯誤」との闘争を繰り返し、革命を遂行してきた「事実」を教訓とする必要があった。ボルシェビキ創建時の同志達の粛清をモスクワで目の当たりにした蕭三にとって、偉大な指導者と共産党の歴史は、路線闘争史として綴られる『連共党史』のようにこのような党内に潜入した反革命との闘いとして描かれるべきものであったともいえよう。

そして、一全大会は早くも毛の「正しい路線」と様々な「錯誤」との闘争の場として描かれることとなる。「初期革命活動」は参加者の叙述に続けて、大会での党の方針を巡る闘争について叙述する。大会では、理論宣伝のみに従事し、組織を発展させず、労働運動を行わないとする李漢俊らの「合法主義」、および如何なる合法運動も行わず、プロレタリア専制を直接の闘争目標とする「極“左”派」という「小ブルジョワジーの“左”右派機會主義」が対立したが、湖南での運動の経験を持つ毛は、「事実と闘争の成果によって」これらを粉砕したとされる。蕭三は『北方文化』の声明において、この叙述の削除も指示しているが、これについて周一平は、大会は右傾の提案を批判したものの、左傾の提案に沿った決議を行っており、毛はこの問題についてほとんど発言しておらず、恐らく蕭三自身の脚色によって生み出された誤りを是正せざるを得なかったものとしている⁽⁶²⁾。

さて、一全大会の参加者について、『北方文化』の声明では、訂正前の原文を示さないまま、以下のように訂正文が示されている。

全国各地の共産主義小組の代表—湖南から来た毛沢東同志、何叔衡同志、湖北から来た董必武同志、陳潭秋同志、山東から来た王寒焮同志、鄧恩銘同志ら、およびもともとから上海に住んでいた李達、李漢俊など12、3人が大会に参加した。

スパイ摘発運動を通じた毛の権威の最終的確立という当時の根拠地の政治的な文脈を離れてしまえば、党の創建に後の「漢奸」やトロツキスト（自身が民族主義を擁護する勢力であることを自認する中共の立場では、中共に敵対するトロツキストは必然的に「漢奸」とされる）が加わっていたという事実は、特に党外の大衆に対しては、党や毛の権威を傷つけるものとして抹消されるべきものであった。統治権力となり粛清を通じて権力を盤石にしていくボルシェビキのスターリン体制と異なり、国民党政権との内戦を遂行する中共にとって、離反者・漢奸らを創設者として語る党の歴史は、広範な大衆の支持を取り付ける上でも不都合とみなされたであろう。

訂正の声明では、一全大会への不参加について言及されていた陳独秀も含め、張国燾、周仏海、陳公博、包惠僧、兪秀松の名前が削除され、新たに鄧恩銘が加えられて、参加数は12人から12, 3人に修正されている。また、毛と何以外の参加者についても代表する地区が明記された。現在、一全大会の実際の中国人参加者は13人と確定されており、兪秀松は参加しておらず、もう1人の参加者は、後にトロツキスト組織に参加した劉仁静であったが、この時点で兪秀松の不参加と劉仁静の参加が確認されていたかは不明である。

参加者数が12, 3人という曖昧な表現に変えられたのは、兪秀松の不参加ないし劉仁静の参加について確定できなかったためとも考えられるが、建国後、包惠僧の参加資格（広州代表、陳独秀の代理人としての参加、陪席など）をめぐる長く議論が行われていることから示唆されるように、包惠僧の代表資格が確定できなかった可能性もある。また、仮に兪秀松の不参加と劉仁静の参加が確定されていたとしても、トロツキストの劉仁静の参加を公開することは既にできなくなっていた。その場合（包惠僧の参加資格に疑義がないとして）、人数を13人と特定すれば、「初期革命活動」の原文を参照できる人々にとって、最後の1人もまた経歴に問題のある人物であったことを言外に示すことになりかねない。12, 3人はその意味でも妥当な数字である。

なお「王寒焮」は王尽美の誤りであるが、この点は『青少年時代』初版の訂正記事「幾点重要更正」で「王焮美」と修正され、同書50年版の同欄では参加者も改めて12人とされた。兪秀松、劉仁静、包惠僧がどのように扱われたかは不明であるが、これによって新たな1人の経歴問題も回避されたともいえる。

更に80年版伝記においては、訂正記事の該当部分は、「もともと上海に住んでいて、成立大会開催の通知の依頼を受けた李達同志など12人が大会に参加した」（99頁）と修正されている。兪秀松の不参加と劉仁静の参加の事実は既に確定しているので、参加者を12人としている点は、「各地共産主義小組の代表が上海に集合した」（98頁）という文脈から見れば、包惠僧を地方代表に含めない立場を示していよう。23年に離党した李達は中華人民

共和国成立後に復党しており、同志と称されている一方、離党後、国民党に参加した李漢俊の名前は削除され、名前が記される大会参加者は共産党員のみとなった。また、『北方文化』の訂正の声明以来、李漢俊の自宅が会場とされたことが加筆されていたが、この事実も彼の名とともに削除されて、会場の地番のみを記す形に変更されている。文革の終息後に修正・刊行された一般向けの伝記において、一全大会に関する政治的タブーは建国初期よりも強くなっているように見える（「初期革命活動」と同修正稿では、文化書社の看板を譚延闓が揮毫したことが明記されていたが、このエピソードも80年版伝記では削除されている）。

一全大会の出席者に関するタブーが大きく緩和されるのは、83年の児童向け伝記『毛沢東青少年時期的故事』においてである。同書では各地の代表12人全員の名前が列挙され、陳独秀の代理人としての包惠僧の参加にも触れられている（92頁）。石川禎浩によれば、80年に邵維正が一全大会の参加者について今日の中共の定説となる「12人代表・13人参加」説を発表しており、この前後から一全大会に関する内部資料も一般研究者に公開されるようになった⁽⁶³⁾。蕭三の伝記の記述の変化もこのような流れに沿ったものであろう。80年版伝記の脱稿は79年9月であるから、参加者に関する叙述の変更は、これ以降同年末にかけて、中共の一致した方針として一斉に行われたものと見られる。

付言するならば、一全大会がコミンテルンの主導で開催され、資金面においても初期の中共の活動がコミンテルンに大きく依存せざるを得なかったにも関わらず、「初期革命活動」から80年版伝記に至るまで、コミンテルン代表としての出席者、マーリン、ニコルスキーについては触れられず、コミンテルンからの参加者があったことすら指摘されていない。中共成立史において一全大会の意義を強調することは、それ以前に中共が事実上成立していたことや、それに関わる指導者らの貢献を差し置いて、大会に参加した毛の貢献を強調する意図があると考えられるが、この大会におけるコミンテルンの貢献は、マルクス主義の中国化を中国革命において実践した毛を讃える伝記においては不要であったということであろう。毛沢東崇拜はスターリン崇拜の形式を参照して成立していながら、毛や自身の独自の権威を強調するため、伝記ではコミンテルンの影響を抹消するという対応がとられているのである。

また大会の開会日に関しては、「初期革命活動」で7月1日と明記したものを、『北方文化』の声明では7月と訂正し、『青少年時代』初稿の「幾点重要更正」においては「6月末7月初め」とし、同書50年版で改めて7月1日に戻している。中共成立記念日が大会開催日ではないことを事実として一旦確認し、敢えて大会開催日を7月1日に戻した可能性が窺える。中共成立記念日は、明確な日付が確定できないまま、38年に毛沢東の主導により7月

1日に指定され、7月7日の抗戦建国記念日に連なる抗戦建国記念週を演出することで、ナショナリズムを擁護する中共の姿勢を強調することに貢献していた⁽⁶⁴⁾。党の誕生日としての7月1日のシンボリック的価値は動かせないものとなりつつあり、蕭三の再度の訂正も、恐らくは中共中央宣伝部の指示の下、このシンボルを史実として定着させる意図によって行われたものと考えられる。80年版伝記では、開催時期は改めて7月に戻されている（98頁）。

訂正の声明に際して蕭三は、『毛沢東故事選』（新華書店晋察冀分店）、『毛沢東印象』（人民出版社）の2冊が彼の文章を引用していることを指摘し、「初期革命活動」の「発表前、毛沢東同志が自ら見たことはなく、文責は完全に私が負うものである」と述べている。王政明によれば、40年6月、毛は蕭三が記した毛との面談時の記録に目を通してはいるが、43年3月の蕭三との面会では、「私の生活の断片を書かないことを勧める。なぜならよく間違いが起こるからだ」、「私は自分のことを書いたものを本当に見る気がしない。これがどういう感情なのか分からない」と述べ、改めて伝記の編纂に消極的な反応を示している⁽⁶⁵⁾。そのため、その後の蕭三の文章について、毛自身が内容を仔細に確認していなかった可能性も完全には否定できないが、中央宣伝部や機関紙などの責任者が刊行前に然るべき確認作業を行わなかったということは考えられない。蕭三のこのような声明は、訂正に関わる政治的問題が党や毛に及ばないための配慮であることは間違いなさであろう。「初期革命活動」は発表から2か月後の44年9月には、重慶の中共機関誌『群衆』第9巻第16・17期に転載されており、その拡散は、各地の党組織や出版社の主体的な転載によるというよりも、中共中央が主導したものと考えられる。日中戦争収束後の45年11月に上海で刊行された伊斯雷爾・愛潑斯（Israel Epstein）等『毛沢東在重慶』（合衆出版社）にも「初期革命活動」が原文のまま転載されている。合衆出版社は翌年、毛沢東の『経済問題与財政問題』のパンフレットも出版しており、共産党系の出版社とみられるが、著者の手を離れた毛の伝記は中国各地に拡散し始めていた。

訂正の声明において、蕭三は訂正前の原文を示しておらず、原文を確認できない者にとっては、何が問題であったかを知ることができない。もちろん、訂正の目的は好ましくない事実や人物を党史から抹消することにもあったため、訂正記事に原文を掲載することで、問題が更に拡散することは是非とも避けなければならなかった。

蕭三の訂正記事の掲載後も、「初期革命活動」を転載、引用、参照した単行本や記事などが引き続き刊行され、周一平によれば、47年以後、各地で刊行された『毛沢東同志 児童時代、青年時代与初期革命活動』は、依然として修正すべき箇所が修正されていなかったという⁽⁶⁶⁾。実際に山東新華書店48年再版の同名書は、「初期革命活動」を原文のまま転載している。また、『冀魯豫日報』47年7月1日掲載の「毛沢東同志略伝」や同4日に晋察冀

軍区機関誌『子弟兵』に掲載された物語では、一全大会の党内闘争の状況が「初期革命活動」の内容に従って叙述されている。蕭三は事の重大さに鑑み、内容を大幅に改定した『青少年時代』を中央宣伝部の審査および同部長陸定一の許可を経て刊行したが⁽⁶⁷⁾、この際「初期革命活動」部分は収録されず、同書の巻末には、『北方文化』掲載の訂正記事の内容が「幾点重要更生」として若干の加筆修正の上、再録された。しかし、全国普及版の新華書店版『青少年時代』が刊行された8月には、新華書店再版（華中版）の『毛沢東同志 兒童時代、青年時代与初期革命活動』が「初期革命活動」を原文のまま収録して刊行されており、49年に至っても「初期革命活動」は、そのまま各地の毛の伝記に転載されて続いていた⁽⁶⁸⁾。

伝記の執筆が正式な組織決定や毛の最終的同意を経ないまま、個々の指導者の蕭三への依頼として行われたこと、問題の解決を蕭三個人に委ね、中共自身が積極的に関与しなかった、あるいはできなかったことが、このような混乱を招いた原因かもしれない。党の機関紙に発表された毛の伝記は、各地の党の宣伝部門も不用意に流用を繰り返すほど、権威の高いものであったともいえる。注目を集めるべくして書かれた毛の伝記とともに一旦流布した「不都合な事実」の回収は困難を極め、50年版以降の『青少年時代』にも「幾点重要更生」が改めて採録された他、目次にもその項目が追加されることとなった。

IV 『毛沢東同志的青少年時代』を巡る加筆修正

1 『毛沢東同志的青少年時代』の成立までの版本

47年からの『時代青年』での「毛沢東同志的青年時代」連載にあたり、蕭三はその一部を構成する「他是怎樣刻苦自学的」（長沙時代の勉学と自由旅行を描いた部分）をかつて『新群衆』に掲載したとし、この連載において修正・増補したものを発表すると説明している（『時代青年』第3巻第4期、6頁）。彼は『北方文化』誌上と同様の表現で、文責は全て自分にある旨の釈明をしており、ここにおいても「初期革命活動」に類似する問題が起きていたことが推測される。『新群衆』発表の原稿は未見であるが、これを転載したものとみられるのが、本文冒頭に「毛沢東同志的青年時代（初稿）」と記された『毛沢東同志的青年時代』（華北新華書店、1949年）であり、『毛沢東的青年時代』（東北書店、1948年、以下『青年時代』）の「毛沢東的青年時代」部分もこれと同じ内容である。実際にこれらには後述するように『時代青年』の連載から削除された毛の権威に関わる内容が含まれており、『時代青年』の連載は、更に三つの章を加筆して四章構成となった（一、捲入辛亥革命運動的漩渦、三、『組織起来』的第一頁（社会活動的初歩経験）、四、站在新文化運動—新民主

主義運動的前哨、を加筆。ただし同誌に掲載予告のある第四章の最終節は未見、『毛沢東同志、児童時代、青年時代与初期革命活動』新華書店、1949年などで当該節を確認できる）。

しかし、その後『時代青年』の連載にも加筆修正が迫られる事態が起きたようである。『青少年時代』の「作者の話」によると、蕭三は『時代青年』で一連の毛の伝記の連載中から、内容と形式を修正する必要があることを何度か声明し、転載や出版の希望がある場合、再版の原稿を届けるので、著者に連絡するよう言明していたが、依然として各地で連絡のないまま転載や出版が行われていた。『青少年時代』は、このような状況を受けて、『時代青年』連載の旧稿を更に修正して刊行したものであった。彼は改めて「私が毛沢東同志について書いた文章は、全て本人が見たことがなく、彼の同意を求めたこともなく、勝手に発表、出版したものである」と声明している。

なお、『時代青年』連載の「毛沢東同志的児童時代」の内、筆者が確認できたのは3つの節のみであるが、その内容は上述の『青年時代』の「毛沢東的児童時代」部分（全8節）などの版本と一致している。同じ内容を第6節まで掲載した『人民日報』の連載記事（1947年1月7日、10日、13日）が「毛沢東同志的児童時代（初稿）」と称していることから、『時代青年』連載の「毛沢東同志的児童時代」が、これらにそのまま転載されたものとみて、大過ないであろう⁶⁹。『青少年時代』収録の第1章「帝國主義与封建主義双重压迫下的少年」は、これに加筆修正を加えたものである。

版本が完全に整わないため、以下便宜的に、A.『青年時代』（『時代青年』連載の「毛沢東同志的児童時代」と『新群衆』の「他是怎样刻苦自学的」を収録していると考えられる）の版本を用い、B.『時代青年』、C.『青少年時代』、「毛沢東」、スノー著などと比較して、伝記の加筆・修正の問題を検討することとする（典拠をそれぞれのアルファベットと頁数で示し、Bについては第4巻第1期をB4-1のように示す）。

2 少年時代のエピソード

少年時代のエピソードについては、「毛沢東」と同様スノー著に一致するものが多い。専制的な父や塾の教師に反抗したこと、経書よりも旧小説を好んだが、後に作品中に農民が出て来ないことに疑問を持ち、これらの人物が農民を搾取する統治者であることを悟ったこと、長沙の飢餓蜂起と鎮圧の消息に同情し、貧民が富家に食糧の供出を強要した際に毛の家も被害に遭ったが、貧民に同情したことなど、幼い頃から共産主義者としての素養を備えていた毛の姿が描かれている。ただし、幼い頃、母とともに神仏を深く信仰していたとするスノー著の叙述は、蕭三による伝記には見られない。

蕭三による伝記の独自の部分は、貧しい小作人の家の農作業を優先して手伝い、自分の

家の作業を後回しにしたことや、貧しい青年に服を与えたこと、取り立てたばかりの豚の売上金を路上で出会った貧民に全て与えたことなど⁽⁷⁰⁾、労働大衆への思いやりが実践となって現れている叙述、高い農作業の能力に関する叙述などである。このような加筆により、毛の実践的な活動家としての素養が示されている。

スノー著では毛は『世界英雄豪傑伝』を通じてナポレオン・ビョートル大帝などを知ったとされるが、「毛沢東」によれば、毛にこの本を貸したのは蕭三であった。しかし、回想の形式を放棄した『青年時代』以降、「一人の同級生」が貸したという叙述に書き換えられている。蕭三による伝記では、毛が読後に「中国にもこのような人物が必要である」などと語ったとされ（A.22頁/C.28頁）、後の英雄としての毛の出現を暗示する台詞となっている。スノー著では、毛の読んだ「アメリカ革命について書いた一文」において、「八年間の困難な戦争の後、ワシントンは勝利を得、彼の国を建設した」と書いてあったことが語られているが（91頁）、蕭三によれば、これも『世界英雄豪傑伝』の文章であった（C.28～29頁）。蕭三にとって自身が貸した本が毛に影響を与え、中国のワシントン・ナポレオンの出現につながったこと、また毛がこのことを鮮明に記憶していたことは、密かに自負するところであったのかもしれない。「八年間の困難な戦争の後」の一文は、『青年時代』の版より加筆されたが（A.22頁/C.28～29頁）、このエピソードは、「八年抗戦」の実績を持つ毛を中国のワシントンになぞらえる格好の材料と認識されたのかもしれない。なお、80年版伝記において、改めて蕭三が毛の同級生・同志であったことが説明されるが、本を貸したのはやはり「一人の同級生」とされ、彼自身であったことが明らかにされることはなかった（25頁）。

3 自由闊達な人間像

蕭三による伝記には、スノー著には見られない自由闊達で親しみやすい毛の人間像が随所に描かれている。ただし、これらの一部は『時代青年』、『青少年時代』の書き換えで削除されている。

スノー著では湖南第一師範受験（実際には、湖南第一師範に編入される前の湖南第四師範学校）の際に、友人2人のために替え玉論文を作成したことが述べられているが、蕭三の一連の伝記では、省立第一中学に合格した時も、友人2人のために替え玉論文を書いていたことが記されている（A.24頁/B3-5.10頁/C.51頁）。

湖南第一師範時代については、スノー著では毛は社会科学を好み、自然科学や図画の科目の勉強で手を抜いたことが述べられている。『時代青年』、『青少年時代』でも同様の記述がある他、このような姿勢が規則違反とされ、三度除籍されそうになり、その都度彼の才

能を惜しむ教員らの仲裁によって除籍を免れたことも述べられている。また、『青年時代』と『時代青年』では、自身の読書計画のために仮病を使い授業を欠席したところを学監に批判されると、「あのような役に立たない授業は私の学習計画を破壊する」、「どうしても出席させるのなら、教員に質問するぞ。教員が答えられなかったら、追い出してやる」と悪態をついたことが描かれている（A.29頁/B3-5. 11頁）。学監への悪態のエピソードは、上述の40年刊行の『中国青年』に発表された謝覺哉の文章において「何叔衡から聞いた」話として初出が確認されるが、『青少年時代』では削除されている。この他、『青年時代』と『時代青年』では、宿舎で深夜勉強のためランプを使用して失火騒ぎを起こし処分を受けたが、全く気にしなかったこと（A.28頁/B3-5. 11頁）、岳麓山で新聞紙に全身を包んで野宿したことも記されていたが（A.33頁/B3-5. 11頁）、これらも『青少年時代』で削除された。

スノー著と『時代青年』においては、辛亥革命期に革命軍に参加した毛が井戸に水汲みに行かずに、水行商から水を買ったことが記されている。このことをスノー著は「私は学生であり、水運びに身を落とすことができず」と説明し（98頁）、『時代青年』は「担ぐ力がなく、またあまり担ぎたくない」かったと説明している（B3-4. 7頁）。一般兵士と労苦を共にしないような姿勢は、革命指導者としてふさわしくないためか、『青少年時代』では、このエピソードも削除された。

自由闊達で人間味あふれる毛沢東像の提示は、中共が都市へと勢力を伸ばし、都市大衆の支持を獲得しようとする段階の中共の戦略に一致しており、内戦末期にかけて都市のセレモニーなどで、都市の洗練と親しみやすさを強調するタイプの毛の肖像が盛んに使用されるようになる状況に符合している。なお、官製のスターリン伝には革命家としてのスターリンの事績が描かれるのみで、幼少期・青年期の履歴には触れないこともあり、蕭三著の伝記に現れるような自由闊達さや親しみやすさを示すエピソードは存在しない。このような差異は、スノーの取材を契機に毛の伝記が幼少期からのエピソードを豊富に収録して成立したこと、毛の幼少期・青年期を知る蕭三という作家を起用できたことに直接起因するが、国民党との内戦あるいは全国政権成立間もない時期において、幅広い大衆に対する支持を取り付けようとする段階にあった中共と、絶対的権力を確立し個人崇拜の絶頂期にあったスターリン体制との差異も関係していよう。中共の権力掌握に伴い、『青少年時代』では人間味を感じさせるエピソードの一部が削除された。更に李全華によれば、その『青少年時代』さえも「恐らくあまりにも真実に迫り、一部の者の不興を買った」ことで⁽⁷¹⁾、51年版を最後に再販されることはなく、54年に完成した新版の伝記も広く刊行されることはなかった。その後の李銳による伝記には、この種のエピソードは全く収録されず、80年版伝記や90年代以降の公式の伝記においても復活することはなかった。『青少年時代』の

絶版は、中共権力の安定とともに、毛の絶対的指導者としての権威も確立し、毛の人間味を強調して広範な大衆の歓心を喚起する段階が終了したことを意味していよう。

4 中国の地理・歴史の知識・古典の素養に富むことの強調

古典の素養や中国の地理・歴史の知識が豊かであることは、スノー著よりも強調されており、『青少年時代』での修正で更に強調されるようになった。

旧小説については、スノー著のエピソードを基に、毛がこれらの作品は「人民を麻痺させ、読者を愚か者にし、奴隷にするもの」と悟ったとする物語が党員向けの教材として広まっていた。しかし、原著では「これらはみな、自ら土地を耕す必要のない武人であり、人民の支配者を賛美していることに気づきました」(87頁)との発言が記されるのみで、毛自身も蕭三に上のような物語が「全く反対で、間違っている」と不満を述べたという⁽⁷²⁾。蕭三も上述の『北方文化』誌上での声明において、この種の物語の「作者の口ぶりでは毛沢東同志が旧小説に非常に反対していることになるが、これは事実と合わない」と批判している。声明は続けて、毛が幼い頃から特に統治階級の圧迫に反抗する物語を好む一方で、これらを批判的に分析して、「ある種の階級意識」を育み、人民の領袖に成長していったことを強調している。『青年時代』の当該部分は、この声明の趣旨に従って描かれ、『青少年時代』では更に文中に註を加えて、声明の論点を詳細に展開している(C.14～15頁)。

上述した『世界英雄豪傑伝』に関して「毛沢東」では、読後「前車の覆るは、後車の鑑なり」と、インドシナ、朝鮮、台湾の植民地化を中国の教訓として捉える毛の危機感が示されていたが⁽⁷³⁾、『青年時代』以降の版では、更にその後に「顧炎武はよく言ったもので、「天下の興亡は、匹夫に責あり」だ」(C.28頁)という一文を追加し、中国の知識人にふさわしい毛の風格を演出している。

省立図書館での読書生活について、『青年時代』ではスノー著同様、「どんな本でも探してきて読んだ——世界歴史、世界地理」(A.25頁)としていたところに、『時代青年』以降の版では、「中国の経史子集、世界各国歴史、地理、哲学、文学」と冒頭に「中国の経史子集」を挿入している(B3-5. 10頁/C.52頁)。また『青少年時代』では、湖南第一師範での読書生活についても、学監への悪態を削除した箇所、「古今中外のあらゆる名著——諸子百家、詩詞歌賦」などを自ら求めて読破したことを加筆している(C.57頁)。この他、『青年時代』では、スノー著のエピソードを引いて、第一師範教員の袁吉六が毛の「梁啓超式」の文章を批判し、唐宋八大家に学ぼう指導したことを記しているが、『時代青年』以降は、「おかげで、今もって必要とあれば読める古文を書くことができます」と、後ほど人に笑いながら話した」(B3-5. 11頁/C.58頁)とやはりスノー著のエピソード(98頁)を加

筆している。ここでの「人」とはスノーのことで、同書は他の箇所でも毛がスノーに語った言葉を「人に話した」という形で記している。『青少年時代』の「作者的話」はスノー著に問題があることを指摘しているが、修正の意図に合う場合には改めてスノー著が利用されているのである。

この他、船山学社での聴講について、『青少年時代』は「王夫子の民族意識は、特に彼の注意を引いた」と加筆し（C.60頁）、長沙での放浪旅行の箇所には、当時のことを詠んだ『沁園春』の一節を取録して、彼の「文学的天才」を讃えている（C.62～64頁）。

以上のような加筆は、国民党との権力闘争の最終段階および全国政権の成立という政治情勢を受けて、中国の指導者としてふさわしい毛の素養を演出する試みの一環であり、上述のような親しみやすい人間像の演出と軌を一にするものであろう。これらの加筆はまた、「毛沢東」やスノー著では十分に触れられなかった青年時代の毛の姿を復元したのもであった。省立図書館での自習時代、毛は西欧近代に強い関心を抱いており、経史子集までを読書の対象にしていたかは疑問が残る。その一方で、第一師範時代には楊昌済の影響の下、毛の関心は国学に向けられるようになり、むしろこの頃に経史子集を必読書としていたのである（80年版伝記では、自習時代の経史子集の学習について触れられなくなった）⁽⁷⁴⁾。古典の素養の強調もまた、スターリンの伝記には見られない毛の伝記独自の特徴といえる。

5 切り分けられた伝統

『青少年時代』は古典に対する毛の素養や歴史文化に対する理解を肯定的に描く一方で、毛の国学に対する傾倒には一切触れていない。中共にとって儒教を核とする伝統思想は「封建階級の統治思想」であり、打倒の対象である以上、毛のナショナリストとしての性格に伝統思想そのものを位置付けることはできなかった。そのため、毛がその成長過程で中国の伝統思想の影響を受けてきたことには言及されず、儒家の中で取り上げられるのは顧炎武、王船山ら清初に反清運動を組織した「愛国者」のみである。曾国藩の著作も毛に深い影響を与えており⁽⁷⁵⁾、ともに楊昌済に学んだ蕭三もこのような状況を理解していたと思われるが、『時代青年』まで彼への言及はなく、『青少年時代』では、太平天国と敵対し人民を虐殺した「大漢奸・処刑人」として描かれている（C.16頁）。

毛らが、楊昌済の絶食、深呼吸、静座などの独自の修養生活をまねたことについて、『青少年時代』では、楊の生活の叙述の前に「彼（楊）は封建的で腐敗した生活に反対し、民主的科学的な新生活を提唱した」と加筆し（C.61頁）、これらが古い不合理な修養方法でないことを強調している。また、毛らの山での座行・冷水行は、「抵抗衛生」の方法」と説明

し、体を太陽、風、雨に晒す鍛錬法については、「期せずして、今日皆が知るところの日光浴、空気浴、淋浴などの療養衛生のよい方法に合致していた」と加筆され、科学的な根拠をもった実践として評価されている（C.61～62頁）。しかし、静座など楊の修養生活は、宋学における治学、修身の一環として提唱されたものであった⁽⁷⁶⁾。

『時代青年』までの版では、儒教の内容やその価値基準に踏み込む叙述もあり、現実の感覚にも即し、幅広い社会層に受け入れやすい毛の姿が描かれていたが、全国政権確立の展望が開けた時期に執筆された『青少年時代』においては、これらは削除されている。『青年時代』では、「沢東同志は現在に至るまで報告や演説を行う時に、よくユーモアを込めて孔子、孟子、四書五経の中の話を用いる。それは新しい観点をを用い、古い辞句や歴史事実を借り、新しい事物を解釈するものである」（A.7頁）という叙述があった。また、儒教の価値基準を援用して、毛の母親を「温良恭儉讓の五徳を備えた女性であった」（A.4頁）とした叙述や、毛の寛大政策を「大仁」と讃えたり（B4-1.5頁）、毛の深い見識を「秀才は門を出でずして、天下の事を知るを能う」とした叙述（B4-2.5頁）もあったが、これらは皆『青少年時代』において削除された。

6 自律的な英邁さの強調

『青少年時代』は、『時代青年』までの版に比べて毛の自由闊達さの描写を抑えた一方で、彼の行動が自由奔放というより、自律的な英邁さによって支えられていたという叙述を展開している。体を太陽、風、雨に晒す鍛錬法が科学的な根拠によって説明されたことも、その一例といえよう。

また、毛らが学生時代に行った「遊学」にも同様の説明が加えられている。蕭三によれば「遊学」とは、旧時行き場のない知識人が機関、学校、商家等のために対聯を書き、金を稼ぎ、宿を借りた行為である。毛らが遊学を始めた動機について、スノー著では、二人の学生が全中国を周遊しチベット辺境のダルツェンドに到着した報道を新聞で読んで羨んだ毛が、湖南周遊を思い立ったと説明されている。一方、遊学をともにした蕭瑜は、彼が自身を鍛錬するために考案した無銭旅行に毛が興味を示し、同行を申し出たものと回想している⁽⁷⁷⁾。上述の謝覚哉の回想は、湖南の社会改革運動の組織を志した毛が湖南全土を調査する計画を立てたとして、遊学の動機を説明している。

蕭三による伝記は、その動機を「毛沢東同志はこのような方法で郷土を遊歴し、農民の生活を考察し、各地の風俗習慣を理解した——これは彼の現実主義的な一面である。また主要な一面である。農民問題は彼の頭の中から、小さい頃から離れなかったのである」とし、全国周遊の記事によって刺激されたことについては、「青年時代のロマンチックな（こ

の名詞の、よい、革命的な意味での一面」(A.34～35頁/B3-6.10頁/C.64～65頁。下線、二重下線は、それぞれ『時代青年』、『青少年時代』での加筆)として、もう一つの動機としている。このように遊学が、旧時の知識人の行動の単なる模倣でも、学生の思いつきの漫遊でもなく、最初から農民の実情を理解するための旅行であったことが説明されている。また、二度の加筆を通じて、この動機が主要なものに位置づけられ、その実践が、調査研究を重視するという毛沢東思想に従ったものであることが強調されるようになった⁽⁷⁸⁾。80年版伝記では毛沢東思想に関する解説が放棄され、全国周遊の報道に刺激されたことについても触れられなくなった(49頁)。

なお、毛が早くから農民問題に関心を持っていたことを強調する書き換えは他にもあり、『時代青年』以降の版では「第一師範の学生は政治社会運動に参加する者が多く、彼らは青年学生運動も行い、また労働運動と農民運動も行った」(A.27頁/B3-5.11頁/C.54～55頁)と下線部を加筆している。ただし、毛が農民問題に関心を持っていたとしても、彼自身がこの時期に実際に従事していたのは労働運動であり、本格的に農民運動に着手するのは24年からであった。

7 美化される民衆

『青年時代』には、民衆の姿にもよりリアルな描写がある。毛らが一か月以上の放浪後、全身真っ黒になって岳麓山に戻った時の農民らの反応は、以下のように描かれている。

農民のある者は、彼らを恐れ、彼らを見ると送字先生〔対聯を書く遊学の知識人〕のようではないし、大声で呼ばれる物乞いのようにでもない。ある者はひどいことに彼らを犬に咬ませた。多少開明的な者は、彼らが遊学送字をする者であることを知っていたが、ある者は四柱推命の占い師だと言った……(A.35頁、[]内は引用者)

しかし、『時代青年』以降の版において農民の敵対的な対応は抹消され、「沢東同志らが農民に接すると、農民はとても歓迎し、とてもよく彼らをもてなした」(B3-6.10頁/C.66頁)という一文を加えて、農民と感情を通じ合う毛の人間的な魅力が強調されるようになった。スノー著でも遊学中の農民の反応について、「どこへ行っても親切に扱われ、歓迎されました」と述べられており(98頁)、『青少年時代』の表現はこれと一致する形に整理されたことになる。

8 「学者の頭脳」の強調

『青年時代』では、毛が新聞で情報を得ながら、第一次世界大戦時の国際情勢を明確に理解、分析し、同級生らに語った箇所について、「確かに毛沢東同志の政治的な頭脳はこの時すでに非常に発達していた」(A.18頁)と叙述するが、『時代青年』以降の版ではこれに続けて、「彼は分析に長け、総括、概括、帰納に長けており——これは科学の頭脳であり、学者の頭脳である」(B3-6. 11頁/C.67頁)と記し、毛が学者として高い能力を身に着けていることを強調している。また文末に、「世界史の巨人マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンと同様に偉大な革命家毛沢東同志は、宣伝家であり、組織家であり、兵士であり、しかしまずやはり学者なのである」(同上)と加筆し、歴代共産主義運動の理論家・指導者と併記する形で、改めて彼の学識を強調している。

なお、『時代青年』の連載は、理論家としての毛の水準の高さを説明するために、多くの毛の論著を引用して、その思想について説明していたが、『青少年時代』はこれらの一部を削除、簡略化している。黨員向けの理論教材という性格を改めて、一般大衆に対する毛の半生を紹介するという目的に合わせた叙述の変化であろう。また、「学者の頭脳」という表現はフランスの作家アンリ・バルビュスのスターリン伝(Henri Barbusse, *Staline: un monde nouveau vu à travers un homme*, Flammarion, 1935: [スターリン: 一人の人物を通して見る新たな世界])の「学者の頭脳を持ち、労働者の風貌をし、兵士の身なりをした人物」(p. 320)という表現を参照したもので、蕭三自身も39年の詩でこの表現を基にスターリンを讃えていた。

9 情報提供者の匿名性と登場人物

『青少年時代』の「作者の話」において蕭三は、毛の戦友、同志、それぞれの時期に彼と関係のあった人物の話、および毛自身の思い出話から材料を得たとしている。李全華は伝記の情報提供者として任弼時以外に、周恩来、朱徳など14名の名前を挙げているが⁽⁷⁹⁾、蕭三は一連の伝記において、これらの個人名には言及せず、当然どのエピソードが誰の提供によるのかも不明である。また伝記にはスノー著に重なる内容も多いが、この点についても言及されず、「初期革命活動」から同修正稿まで、作者の蕭三自身が毛の同窓生、政治運動の同志であったことにさえも触れられてない。情報提供者の秘匿は、毛の権威を保証するためと考えられ、毛の肖像の撮影者の名前が秘匿されたこと⁽⁸⁰⁾と類似する状況が認められる。ただし毛が自身の伝記の編纂に消極的であったこと、49年の中共七期二中全会が指導者に対する個人崇拜を禁止したことなどから、伝記は党組織の編纂としてではなく、個人の作家の作品として刊行されることになったと考えられる。

これに関連して一連の伝記において、毛の級友や同志として登場するのは烈士に限定され、蕭三自身が登場しないのはもちろんのこと、新民学会で行動を共にした後の共産黨員などで存命の人物も登場しない。これらの中には新民学会の発起人として重要な役割を果たしながら毛と袂を分かった蕭瑜や、後に党の路線闘争において批判された李立三などもおり、毛の権威を担保するためには不要であった。また、中共の編集する伝記や物語が基本的に毛・朱徳と烈士に限定されたことに示されるように⁽⁸¹⁾、毛に依拠して存命の黨員の権威を高めることも慎重に回避されていたことが理解できる。

陳独秀については「毛沢東同志的青年時代」の旧稿では言及されていないが⁽⁸²⁾、五四運動の叙述においてさすがに触れないわけにはいかず、『青少年時代』では、マルクス主義の理解が非常に浅く、自身の考えに固執し、右翼日和見主義の誤りを犯して、大革命失敗の主な原因一つとなった、後にトロツキストとなり反革命の道を歩んだとの批判付きで紹介し(103頁)、毛が北京滞在中に多大な影響を受けたことには触れていない。戦後内戦期に執筆された毛の伝記において、現役黨員で言及されるのは徐特立のみである⁽⁸³⁾。なお、中共入党以後の毛の活動を描く「初期革命活動修正稿」以後の伝記では、存命の中共黨員が登場することになる。蕭三が毛の同級生・同志であることが明示されるのは、上述のように80年版伝記においてである。

この他烈士の死について、『時代青年』は蔡和森の死を単に「犠牲になった」(革命に身を捧げた)としていたが、『青少年時代』では四肢を「壁に打ち付けられて、生きたまま殴り殺された」などと残酷な表現によって反革命に対する敵意を煽っている(B3-5.12頁/C.59頁)。ただし、楊開慧の首が長沙の城門に3日間晒されたという『時代青年』の叙述は、『青少年時代』では削除された(B4-2.13頁/C.94頁)。これも毛の権威への影響に配慮した結果と考えられる。

おわりに

中共の毛沢東崇拜は、スターリン生誕の慶祝活動を一つの契機として進展し、「太陽」、「救星」などの表現による指導者礼賛、生誕の慶祝と伝記の編纂というスターリン崇拜の一連の形式を参照しながら、進展していった。最終的に毛をマルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンに並置する形での崇拜の形式は避けられ、伝記も「偉大的五十年」という形での刊行はなされなかったが、「太陽」、「救星」のシンボルは民間信仰を含む中国民衆自身の言葉として読み替えられ、ソ連モデルを忠実に参照して導入された毛沢東崇拜は中国自身のものとして定着していく。マルクス・レーニン・スターリンら指導者の学生となる

べき共産党員の姿勢が、「民衆の学生となる」、「人民に奉仕する」という毛沢東思想のキーワードに変換されることで、毛沢東思想はその独自性を主張することにも成功したと言えよう。

路線闘争を党史の基本的な叙述スタイルとするスターリン主義の歴史観は、「偉大的五十年」の第一章である「初期革命活動」の叙述にも継承されたが、盤石なスターリン体制下での路線闘争の歴史叙述とは異なり、毛が党内での最終的な権威を確立したばかりで、かつ国民党の全国政権と対峙する状況下、一全大会の参加者と同大会の党内闘争に関する叙述は、伝記が非党員大衆を対象に拡散する時期においては不都合なものとなった。『青少年時代』に結実する毛の伝記は、階級の闘士としてのみ記述されるスターリンの伝記とは異なり、幅広い大衆の支持を獲得するために、自由闊達で親しみやすい人間像を提示することになったのである。そのようなエピソード形成の起源は、中共権力がスノーのインタビューに応じて毛の姿を世界に示そうとしたこと、および中共内での毛の権威確立の初期段階において紅軍幹部らの回想の形で人間味あふれる革命家毛沢東の姿が提示されたことにあり⁽⁸⁴⁾、これらは内戦期においても広く刊行され、毛のイメージ形成に貢献したのである。

【付記】「対『毛沢東故事選』幾点重要更正」『北方文化』第1巻第6期および『時代青年』連載の「毛沢東同志の青年時代」は、石川禎浩氏より提供を受けた。ロシア語文献利用に関する知識、ロシア語の読解に関しては、市川浩氏にご教示を賜った。ロシア国立社会政治史文書館所蔵の文書複写に関しては、広島大学付属図書館の三宅亜弥氏にご尽力頂いた。ここに深く謝意を表する。

註

- (1) 原文は、“The Autobiography of Mao Tse-Tung, as Told to Edgar Snow”, *Asia*, July–October, 1937. 汪衡訳が『文滴』（後に『文滴戦時旬刊』）に連載されて後、黎明書局版などの訳本が刊行された。
- (2) 石川禎浩「コミンテルンから中国革命・中ソ対立へ」『スターリニズムという文明』岩波書店、2017年。
- (3) 石川禎浩『赤い星は如何にして昇ったか 知られざる毛沢東の初期イメージ』臨川書店、2016年、86～111頁。高自立「毛沢東伝略」『党的文献』1992年第2期、63–71頁。行論の都合上、伝記の成立に関する叙述は、丸田孝志「毛沢東の物語の成立と発展 日中戦争から建国初期」『東洋史研究』第77巻第4号、2019年に若干重複する。
- (4) 王政明『蕭三伝』北京図書館出版社、1996年、253～254頁。最初の伝記の掲載先は記さ

れていない。

- (5) 中国語訳は『党的文献』1993年第3期、第4期に掲載。
- (6) 毛の物語については、丸田前掲論文を参照。
- (7) 「中国共产党在民族戦争中的地位 1938年10月在拡大的6中全会の報告（論新階段の第7章）」、毛沢東文献資料研究会編『毛沢東集』第6巻（第2版）、蒼蒼社、1983年、245頁。
- (8) 徳田教之『毛沢東主義の政治力学』慶応通信、1977年、64～87頁。
- (9) 周一平前掲書、69頁。
- (10) 王政明前掲書、253頁。
- (11) 高陶『蕭三』中国青年出版社、1991年、257～258頁、王政明前掲書、284頁。
- (12) 王政明前掲書、287～288頁。
- (13) 石川禎浩『『中国の赤い星』再読』、石川禎浩編『現代中国文化の深層構造』京都大学人文科学研究所、2014年、14～16頁。
- (14) 師哲（劉俊南・横澤泰夫訳）『毛沢東側近回想録』新潮社、1991年、59頁。
- (15) 石川前掲書82～86頁。
- (16) 周一平前掲書、70頁。
- (17) 王政明前掲書、340頁。「中央のある指導者」とは、当時、中共中央宣伝部副部長として晋察冀辺区に入った陳伯達の可能性も考えられる。
- (18) 周一平前掲書、70頁。
- (19) 王政明前掲書、340頁。49年までに同名の書は複数確認できるが、いずれも、後述するような旧稿を転載したもので、蕭三が求めた修正が反映されておらず、同名書は中央宣伝部が批准する形では刊行されなかったと考えられる。
- (20) 蕭三「在毛沢東思想的旗幟下前進（序言）」『毛沢東同志的青少年時代和初期革命活動』中国青年出版社、1980年、2頁。
- (21) 北京出版社版は未見のため、小論での引用は新華書店版による。
- (22) 蕭三前掲「在毛沢東思想的旗幟下前進（序言）」、3頁。
- (23) 同上、1～4頁。9つの初稿の表題は、「秋収暴動一向井崗山進軍」、「展開了十年土地革命」、「遂川之行」、「綱領性的古田會議決議」、「粉碎对中央根拠地的四次围剿」、「精辟深湛的理論、正確靈活的政策」、「革命的灯塔举得更高更亮了」、「他的本色和某些作風」、「團結的大会、勝利的大会」であったとされる。
- (24) 同上4頁。
- (25) 亜歴山大・奥爾洛夫（斯仁訳）『斯大林肅反秘史』星光書店、1988年、49頁。
- (26) 張捷「斯大林与個人崇拜」、紅色文化網、<http://www.hsw.org.cn/wzzx/lyd/1s/2013-05-29/21045.html>、2019年3月16日閲覧、楊卡庫巴拉（Янка Купала）（蔚碧訳）「我歌頌斯大林」『群衆』第4巻第16-17期、1940年。
- (27) 毛沢東「在延安各界慶祝斯大林六十寿辰大会上的講話」『新華社電訊稿』第563期、1949年12月19日。ただし、この講話はスターリン70歳慶祝の際に発表されたものであり、当日の大会の状況を報告した徳平「斯大林六十誕辰在延安」『中国婦女』第1巻第8期、1940年において紹介された毛の発言には、「スターリンこそが全人類の歴史上、社会主義を建設した最初の人物である」との賛辞はあるが、「救星」という語は記録されていない。
- (28) 蕭三「国際歌歌辞修改説明」『中国青年』第2巻第3期、1940年。「国際歌」『工人之路』第18期、1925年。

- (29) 「国際歌」『新青年』第1期、1923年。39年改訳の全歌詞（原歌詞の1,2番と6番）は、「国際歌」『八路軍軍政雑誌』第1巻第11期、1939年を参照。
- (30) 近藤邦康『毛沢東 実践と思想』岩波書店、106頁。
- (31) 高華『紅太陽是怎样升起的：延安整風運動的来龍去脈』香港中文大学出版社、2000年、115～116頁。
- (32) 石川前掲「コミンテルンから中国革命・中ソ対立へ」。木村汎「党史と政権：歴史的・比較的的研究」『スラヴ研究』16号、1972年。
- (33) 高華前掲書、116頁。
- (34) 石川前掲「コミンテルンから中国革命・中ソ対立へ」。
- (35) 劉少奇『關於修改党章的報告』東北書店、1947年、5頁。
- (36) 29年12月、スターリン50歳生誕慶祝に際して、『プラウダ』はスターリンに「マルクスとレーニンの事業の忠実な継承者」、「国際プロレタリア革命のための不屈の闘士」など、6つの賛辞を送っている。*ПРАВДА*, 21. Декабрь. 1929.
- (37) 蕭三『毛沢東同志的青年時代』東北書店、1～2頁。後述のように『時代青年』連載の「毛沢東同志の児童時代」の内容を転載したものと考えられる。原本は未見。
- (38) 史達爾斯基（Стальский）「列寧是我們的太陽」、瑪耶可夫斯基（Маяковский）等・之分訳『列寧是我們的太陽』海燕書店、1940年、37頁では、「レーニン是我々の太陽である 我々は彼を巡って回る スターリンの鋭い眼は彼の天才を輝かせる」と謳われている。「和徳国作家艾米爾・路德維的談話」（1931年12月13日）『斯大林全集』第13巻、93頁。
- (39) 「致吳玉章」（1948年8月15日）『毛沢東書信選集』、303～304頁。
- (40) 游和平『毛沢東与習俗文化』中共党史出版社、2008年、216～223頁。「致何凱豐」（1943年4月22日）『毛沢東書信選集』、212～213頁。『毛沢東年譜』中巻、427、434頁。ただし、游和平が指摘する42年12月の集団祝寿は『解放日報』や『毛沢東年譜』等には記載されていない。また、本論集掲載の小野寺史郎「中華人民共和国初期の「記念日資料」中の毛沢東略伝について」によれば、非公式な形で小規模な祝宴などとして、党幹部による毛の生誕慶祝が行われることがあった。
- (41) 指導者の生誕慶祝を行わない方針は、49年の七期二中全会において組織決定された。「党委会的工作方針」（1949年3月13日）『毛沢東選集』第4巻、人民出版社、1991年、1443頁。
- (42) *Asia* 誌上の毛の口述の連載とスノー著の当該部分（第4部）は、内容がおおよそ一致しているので、煩を避けて、以下、スノー著との比較として論じ、両者の記載に異動がある場合のみ、その点を指摘する。また、日本語訳と引用箇所を表示においては、松岡葉子訳『中国の赤い星』（増補改訂版）、筑摩書房、1972年によった。
- (43) 1949年7月の段階でスターリンは劉少奇に対して、中共が組織する新政権が将来的に普通選挙を通じて憲法を採択することを求めており、憲法発布に基づく正当性の確認は、中共にとっても政治的課題であり続けた。杜崎群傑『中国共産党による「人民代表会議」制度の創設と政治過程』御茶の水書房、2015年、第3章参照。
- (44) 竹内実『毛沢東』岩波新書、1989年、56頁。
- (45) 亜歴山大・潘佐夫前掲著、109～113頁。
- (46) Эми Сяо, Мао Цзэдун. Биографический очерк. М., 1938; Личное дело Мао Цзэдуна // РГАСПИ. Ф.495.Оп.225.Д.71.Т.1.Л.293.
- (47) 周一平前掲書、32～34頁。

- (48) 竹内前掲書、55～56頁。王興国「毛沢東世界観転変時間新探」、全国毛沢東生平思想研討会組織委員会『毛沢東百周年紀念論文集』（上）、1994年、564～580頁。
- (49) 「關於農村調査」（1941年9月13日）『毛沢東農村調査文集』人民出版社、1982年、21～22頁。
- (50) 李銳前掲書、141～144頁。ただし、李銳は、スノー著のエピソードの毛の発言を引用しながら、3冊の本に言及した部分を削除している（119頁）。
- (51) 石川禎浩『中国共産党成立史』岩波書店、2001年、178～179頁。
- (52) 同上、付録2「中国社会主义関連書籍解題」。
- (53) 1920年に各地に成立した共産党系の諸組織において、アナキストと社会主義者が未分化な状態であったことについては、前掲石川『中国共産党成立史』、178～229頁を参照。
- (54) 周世釗『毛沢東青年時期的故事』中国少年儿童出版社、1977年、58頁。
- (55) 「關於農村調査」、22頁。
- (56) 蕭三『毛沢東同志 兒童時代・青年時代与初期革命活動』山東新華書店、1948年再版。同上、蘇南新華書店、1949年。同上、新華書店（華中版）、1949年。中外名記者合著『訪問毛沢東記』文献出版社、1949年。『毛沢東同志的青少年時代和初期革命活動』人民出版社、1949年（斯諾等著・劉統編注『早年毛沢東 伝記、史料与回憶』生活・讀書・新知三聯書店、2011年に採録）。
- (57) スノー著では、江亢虎のパンフレットを読んだと記述されているが（94頁）、蕭三による伝記では名前が挙げられていない。彼が後に汪精衛政権に参加したことも影響したものと考えられる。
- (58) ただし、文革初期には、『毛沢東自伝』「万里紅」戦闘隊、1966年、『毛沢東自伝』広西全国大寨濃展紅衛兵大隊、1967年、『毛沢東自伝』紅衛兵石家庄革命造反連絡站、1967年など、各地の紅衛兵組織などによって、内部発行版の『自伝』の翻訳が刊行されている。
- (59) スノー著の原文から『共産党宣言』の翻訳者陳望道の名が削除されている。陳の訳書の出版が毛が同書を読んだとする20年夏頃よりも後であったことが確定されたためと考えられる。
- (60) 「対『毛沢東故事選』幾点重要更正」『北方文化』第1巻第6期（1946年5月16日）。
- (61) この他、湖南での労働運動の叙述においても、毛や中共が派遣して運動を指揮させた人物として易礼容の名が挙げられているが、易は後に国民党に活動の場を移した人物であり、『北方文化』の訂正の声明によって、彼の名前も削除されることになった。
- (62) 周一平前掲書、125～136頁。ただし「初期革命活動修正稿」では、党内闘争と毛の役割についての「初期革命活動」の叙述が「第一箇兩条戦線の闘争」という節を付して復活している（『中国青年』第62巻、1951年、38～39頁）。全国政権の成立により、党外者にも党内闘争の歴史が強調できる環境が整ったということかもしれない。この叙述は、80年版伝記で改めて削除された。
- (63) 石川前掲書『中国共産党成立史』、287、420～423、427頁。
- (64) 中共成立記念日の歴史叙述を巡る問題については、石川禎浩「思い出せない日付—中国共産党の記念日」、小関隆編『記念日の創造』人文書院、2007年を参照。
- (65) 王政明前掲書、288～289、324頁。
- (66) 周一平前掲書、70頁。
- (67) 同上、70～71頁。

- (68) 註 (56) 参照。
- (69) 『人民日報』の連載は他の版本にある最後の2節を欠いているが、『時代青年』第1巻第6期、1946年に第7節にあたる部分が確認でき、通常記載される連載の終了の表示がないことから、連載当初から「毛沢東同志的児童時代」は8節構成であったと考えられる。
- (70) 豚の代金のエピソードは、柳六文「我所知道的毛沢東先生二三事」『新華日報』1945年9月8日が初出であり、蕭三による伝記では『青少年時代』において加筆された。
- (71) 李全華「編集後記」、蕭三『毛沢東的青少年時代』湖南出版社、1988年、90頁。
- (72) 王政明前掲書、324頁。スノー著のエピソードを元にして改編された中共の教材を巡る問題については、丸田前掲論文、145～147頁。
- (73) 『青少年時代』では台湾が除かれ、安南、高麗、インドが例として挙げられている。台湾が中国の一部である以上、台湾の事例は中国の教訓にはできないことになる。
- (74) 中屋敷宏『初期毛沢東研究』蒼蒼社、1989年、87～92頁。「致蕭子昇信」(1916年2月29日)、中共中央文献研究室・中共湖南省委『毛沢東早期文稿』編輯組『毛沢東早期文稿』湖南人民出版社、1990年、32頁。
- (75) 彭大成『湖湘文化与毛沢東』湖南出版社、1991年、185頁。
- (76) 中屋敷前掲書、104～105頁。
- (77) シャオ・ユー（高橋正訳）『毛沢東の青春 その秘められた日々』サイマル出版会、1976年、77～82頁。
- (78) 『時代青年』においては、毛の著作などを引用して調査研究の重要性を強調する解説も加えられた。『青少年時代』ではこの部分は削除されたが、表題の「遊学」に「調査研究を開始する」の副題が加えられている。
- (79) 李全華前掲「編集後記」、89頁。
- (80) 丸田孝志『革命の儀礼』汲古書院、2013年、196頁。
- (81) 丸田前掲論文、141頁。
- (82) 当該部分は『時代青年』連載のものを確認できなかったので、同じ内容を転載していると思われる、蕭三前掲『毛沢東同志 児童時代、青年時代与初期革命活動』新華書店、49～53頁によった。
- (83) これ以前の伝記で、登場する執筆当時存命の黨員は、「毛沢東」において、朱徳の他、「南昌起義」の叙述で賀龍、葉挺、「毛沢東同志的少年時代」では蔡暢、「初期革命活動」では一全大会参加者の董必武が確認される。
- (84) 丸田前掲論文、142～144頁。